

ベ フ デ イ

——ベツィミサラカ族とシハナカ族の狭間で——

前 田 成 文*

Befody: A Settlement between the Betsimisaraka and the Sihanaka

Narifumi MAEDA*

This paper provides supplementary notes on the flexibility of ethnicity in the vicinity of Lake Alaotra Madagascar. It deals with a settlement, Befody, in the fringe area of the Sihanaka. Befody mostly consists of immigrant Betsimisaraka from the south and west. They identify themselves as Betsimisaraka; but outsiders, mainly the Sihanaka, regard them a part of the Sihanaka. In actuality there are

differences between Befody people and other Sihanaka in pursuing subsistence and in tomb-centered grouping: the Betsimisaraka are engaged in swidden cultivation as well as wet-rice cultivation and tomb-centered groupings are not observed in Befody. Otherwise, they live a Sihanaka life. So their ethnicity becomes an arbitrary label.

I 背 景¹⁾

本論はマダガスカル島の中央高地の東北に位置するアラウチャ (Alaotra)²⁾ 湖盆地東北に居住する、ベツィミサラカ (Betsimisaraka) 族の移住集落のサーベイの報告である。アラウチャ湖東南に位置するシハナカ (Sihanaka) 族の集落 (ヴァンドゥザナ Vandrozana) に関する論文 [Maeda and

Rabarijoelina 1988] の補足ないしは比較材料として、主にベツィミサラカのシハナカ化というエスニシティの漸移の問題を考えるための民族誌的事実を提示する。

アラウチャ湖はその湖域をせばめつつあるが、アラウチャ・マングル (Alaotra-Mangoro) 回廊と呼ばれる陥没地溝の北に位置している。湖面は標高 750 m 位にあるが、周辺は 1,000 m 以上の山に囲まれている。東側は 1,400~1,500 m (Belangaina 山 1,580 m) の山々が湖畔から 20-30 km 位の範囲にそびえている熱帯多雨林地帯が東海岸まで続き、多雨林地帯に入るとそこはベツィミサラカ族

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 本稿は昭和61年度文部省科学研究費 (研究代表者・高谷好一教授) による臨地研究に基づく。臨地研究にあたっては、Rabarijoelina Armand との共同調査といって良い程、同氏に依存することが多かった。本来ならば共同執筆者とすべきであるが、日本語であるので同氏の名前を掲げることは遠慮した。

2) マラガン語の日本語表記には、あまり複雑にならぬように、例えば *tr*, *dr* 音はタ・ダ行あるいはラ行に簡略化した。

の居住地である。湖の西及び西南に低湿地が広がり、大規模な水田開拓の対象となった。しかし、その更に西にはやはり 1,300 から 1,500 m の山がそびえ、それを越えるとサカラバ (Sakalava) 族の住む西海岸に流出するマハジャンバ (Mahajamba) 川が流れている。湖の南北は 1,000 m 位の丘陵地帯にはばまれているが、北にはアンディラメナ (Andilamena) 盆地、南にはマングル (Mangoro) 河谷及びディディ (Didy) 盆地がある。南へのびる地溝に沿って首都アンタナナリブ (Antananarivo) と東海岸の港を結ぶ幹線道路の中継点であるムラマンガ (Moramanga) にかけてはベザヌザヌ (Bezanozano) 族が住む。西南のアンジャフィ (Anjafy) 山系を越えるとメリナ (Merina) 族の領域に入っていく。マハジャンバ川はアンジャフィに源を発する。北はマルヴァアラヴ (Marovoalavo) 山系を越えてツミヘティ (Tsimihety) 族の拡張領域に入る。

四方から湖に河川が流入しているが、流出しているのは北東部のイメリマンドゥス (Imrimandroso) の北のマニングリ (Maningory) 川だけである。もちろん岩盤、滝、急流にはばまれて舟での連続航行は不可能であるが、川筋に沿って数日で東海岸に出ることができる。東海岸から湖に出るルートはその他にもあるが、あるいはこのマニングリ川ルートを伝って、人が移住してきたのかも知れない。しかし、アラウチャの名前がインドネシア語の laut (海) と関係があるとなると、最初に湖の名をつけた人々は、南のサハベ (Sahabe) 川のように湖に流入する川伝いにこの地域に入ったと考える方が合理的かも知れない (図 1 参照)。

このマニングリ川の北岸にヴヒメナ (Vohimena) 郡がある。この郡は湖の対岸にあるアンパラファラヴラ (Amparafaravola) に庁舎を置く県に属する。アンパラファラヴ

ラ県は大きくはトァマシナ (Toamasina) 州に含まれる。ヴヒメナ郡は 14 村フクンタニ (Fokontany) に分かれており、人口 9,108 人 (男 4,541 人, 女 4,567 人) 面積 517 km² である。³⁾ その中のアンピサラハナ (Ampisarahana) 村は、ヴヒメナの町から未舗装の道路を南へ 5~6 km 程いったアンレバケリ (Andrebakely) から東へ更に約 12 km 入った所に位置する (図 2 参照)。人口は 1,042 人 (男 518 人, 女 524 人) であるが、5 つの部落に分かれている。アンピサラハナ部落 (345 人) は村の中心で、アンレバケリにもっとも近く、南はマニングリ川に接している。その北に比較的新しく開拓されたベラマンジャ (Beramanja) 部落 (110 人) があり、その東にアンブディヌヌカ (Ambodinonoka) 部落 (156 人)、アンバラハズ (Ambalahazo) 部落 (234 人) が位置する。調査部落のベフディ (Befody) はこれらの部落の東側の、湖からは一番奥地にあり、東隣りはタナンベ (Tanambe) 村となる。このタナンベ村は完全に多雨林地帯の中にある。

アンレバケリで標高 757 m であるが、ベフディでは 790 m 前後になる。周囲に見える山々には 1,000 m を越えるものがない。しかし、その多くの頂上には、昔の環壕跡を残しているものが多い [cf. Battistini et Vérin 1964; Fernandez 1970]。この村の中では、アンブイベ (Ambohibe)、アンブハナツェンザ (Ambohanatsanza)、アンツァスア (Antsasoa)、アンバラハズ、アンブイバウ (Ambohibao) に環壕跡がある。アンブイチャンブ (Ambohitrambo) は 3 重から 6 重の堀をもち、排水溝もしっかり作られ、その西の丘は墓地になっている。ベフディの南のアンブイバウは 3 重の堀を東西にもつが、南北は頂上付近の斜面を削って近寄り

3) 郡庁の数字による。

前田：ベ フ デ イ

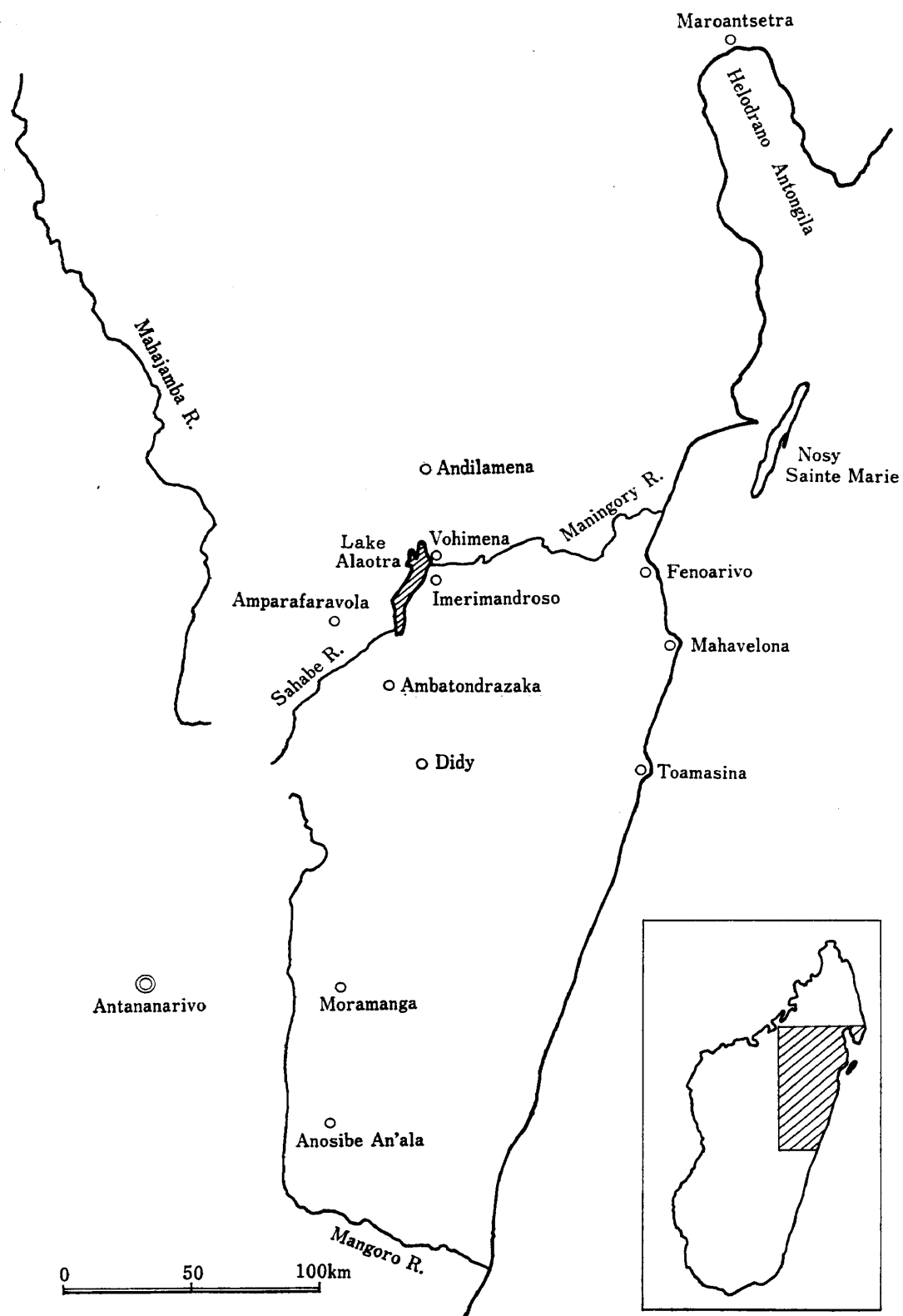


図1 アラウチャ湖周辺

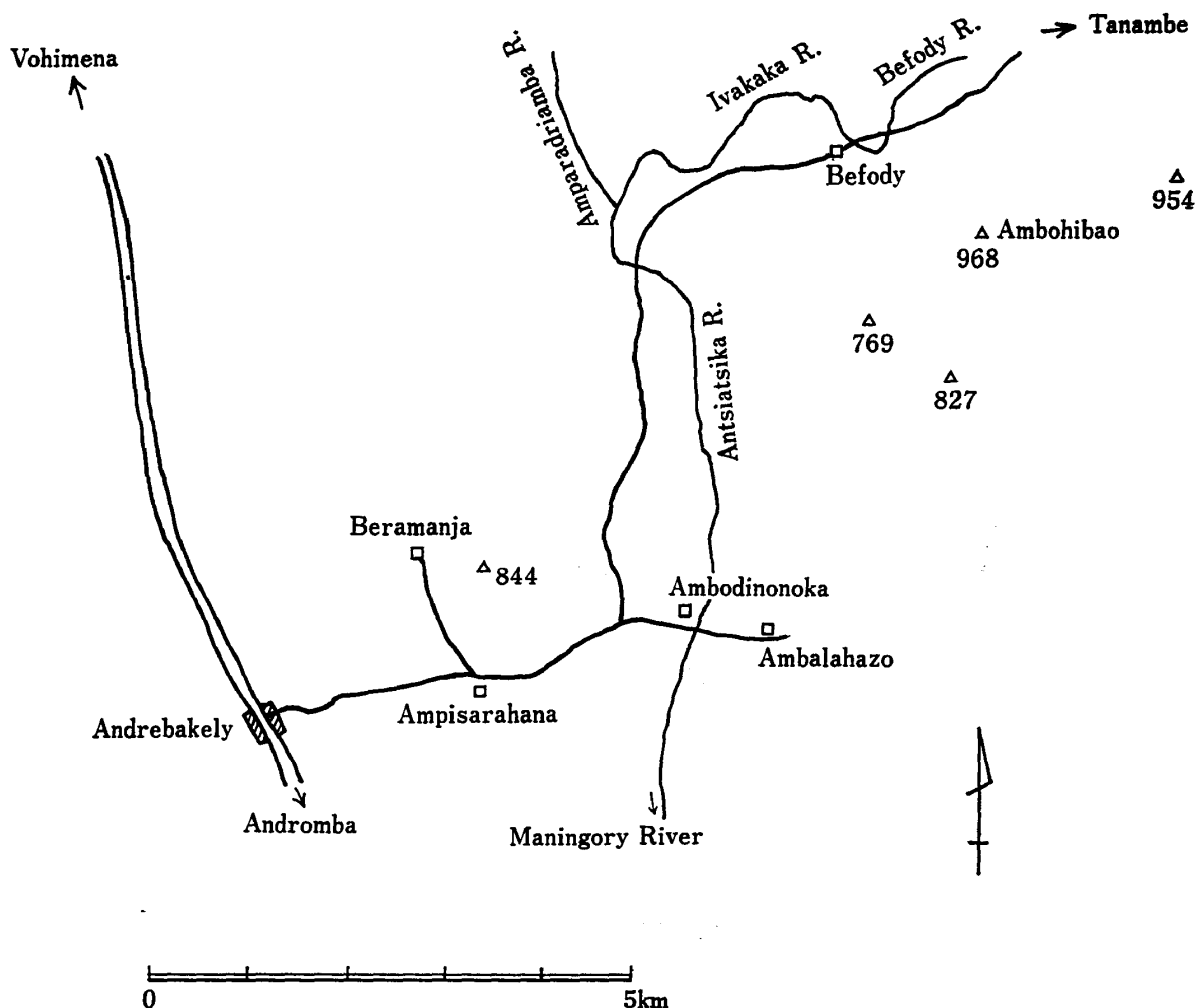


図2 アンピサラハナ概念図

難しくしたもので、⁴⁾ その居住跡には祈願をかける儀礼のジュル (joro) を今でも行なっている形跡がある。

アンピサラハナ部落はかなり古い集落であるが、もともとはマニングリ川の南のアンジュンバ (Andromba) から移住してきたものと言われる。このアンジュンバには環壕跡があり、同じように古い集落と言われるアンバラハズ、アンレバケリは平地村であるので、アンジュンバの方が古いのかも知れない。村内ではアンバラハズ部落がもっとも古いと言われ、周辺の部落も、もとフランス人の所有

地であったベラマンジャもこの部落から移住していったものと言われる。

II ベ フ デ ィ

アンピサラハナ村のベフディを除く4部落は一応シハナカの村ということになっている。アンブディヌヌカ部落を過ぎてからは道が北上していくがこの部落のはずれからベフディまでは集落がなく、イヴァカカ (Ivakaka) 川沿いの昔フランス人が稲作を試みていた所は牧草地として利用される位で、放棄されている。道が東に曲がり始めて、水田が見え出すとベフディの部落に入

4) ランビナ (lambina) の木を鋤にして、雨を利用して排土しながら掘っていく。

る。谷間には緑が見えるが、山腹は一面ブザカ(*bozaka, horona, Andropogon gryllus*), チガヤ(*tenina, Imperata arudinacea*)におおわれたはげ山である。しかし、部落を越えて東側は森林が残されている。このベフディに現在居住している人は土地の人ではなく、現在の長老(*ray aman-drenin'ny tanana*)はヴヒメナとアンバトゥンラザカ(*Ambatondrazaka*)のちょうど中間にあるアンバトゥスラチャ(*Ambatosoratra*)の東の山にあるアンヂャヌマラザ(*Andranomalza*)で生まれて、4歳の時(1933年)父・祖父らとここに移住し、当事材木業を営んでいたシハナカ人のラドゥアカ(*Radoaka*)のもとで働いた。しかし、父を含めて、現在いる多くの人の出身地は、南ベツィミサラカのアヌシベ・アニアラ(*Anosibe An'ala*)であったという。ベフディに最初に集落を作ったのは現在よりやや北東の丘で1940年頃と言われる。1947年頃に更に北東に移住、この時は他地方からも人が来て、30~40軒にもなったという。1960年前後に、27軒あった全部が最初の集落地にもどり、更に1980年に現在地に移転した。材木業者は人が代わったが、1960年頃までに操業を終了して、現在は木材の伐り出しはない。長老の父(1960年死亡)はそれまで労働者監督だった。

このベフディの住民の属するというベツィミサラカ族は、アントンジル(*Antongila*)湾からマナンジャリ(*Mananjary*)までの東海岸部の沿岸、多雨林地帯に住む人口約120万と言われる種族である。18世紀前半にベツィミサラカ全体を統合するような連合体ができたが、その後瓦解した。しかし、その連合体の中心となったザナマラタ(*Zanamalata*)⁵⁾の優勢な北部(アンタヴァラチャ

Antavaratra)と、より伝統的な南部(*Antatsimo*)とは文化的な対立があると言われる[Ralaimihoatra 1982: 44]。現在は焼畑耕作、水田稲作、商品作物(丁字、バニラ、コーヒー)栽培、沿岸漁業に従事している。しかし18世紀には、コモロ群島、アフリカ東岸まで遠征、捕鯨で有名でもあった[Vérin 1986: 123 ff]。さらにさかのぼれば、16世紀初頭以来ポルトガル人との接触があったわけであるが、その他の西洋人も東インド諸島への航海の途次に1596年アントンジル湾に立ち寄って米などの食糧を得ている[ハウトマンほか 1981: 第9章~第13章]。その記述によると、男は狩猟、漁業、戦闘に従事し、穀物・果実の植付け、種蒔き、取入れは女の仕事であるという[同上書: 84]。集落の近くの「畑にはまだたくさん稲が干してあった」[同上書: 74]とあるので、既に焼畑稲作以外にも稲作を行っていたようである。

表1 ベフディの人口

年 齢	男	女	計
0-9	22	25	47
10-19	11	14	25
20-29	9	10	19
30-39	6	3	9
40-49	4	7	11
50-59	5	1	6
60-69	2	2	4
70-79	1	2	3
計	60	64	124

17世紀以来、西洋人がしばしば寄港する所となった。ベツィミサラカ族との結婚も多く、ザナマラタ(*Zanamalata*)と呼ばれるメスティン層が形成された。英国人海賊とベツィミサラカの王女との混血であるラチミラフィが、後にラマルマヌンプと名をのって、北ベツィミサラカを統合し、最終的には南北を統合した盟主となった。この王の時にベツィミサラカ(*be*=沢山の; *tsy misaraka*=分離しない)という名前が採用された[Lahady 1979: 23]。

5) 東海岸のアントンジル湾、サント・マリー(*Sainte Marie*)島、マハヴェルナ(*Mahavelona*、フランス時代の *Foulepointe*)は、

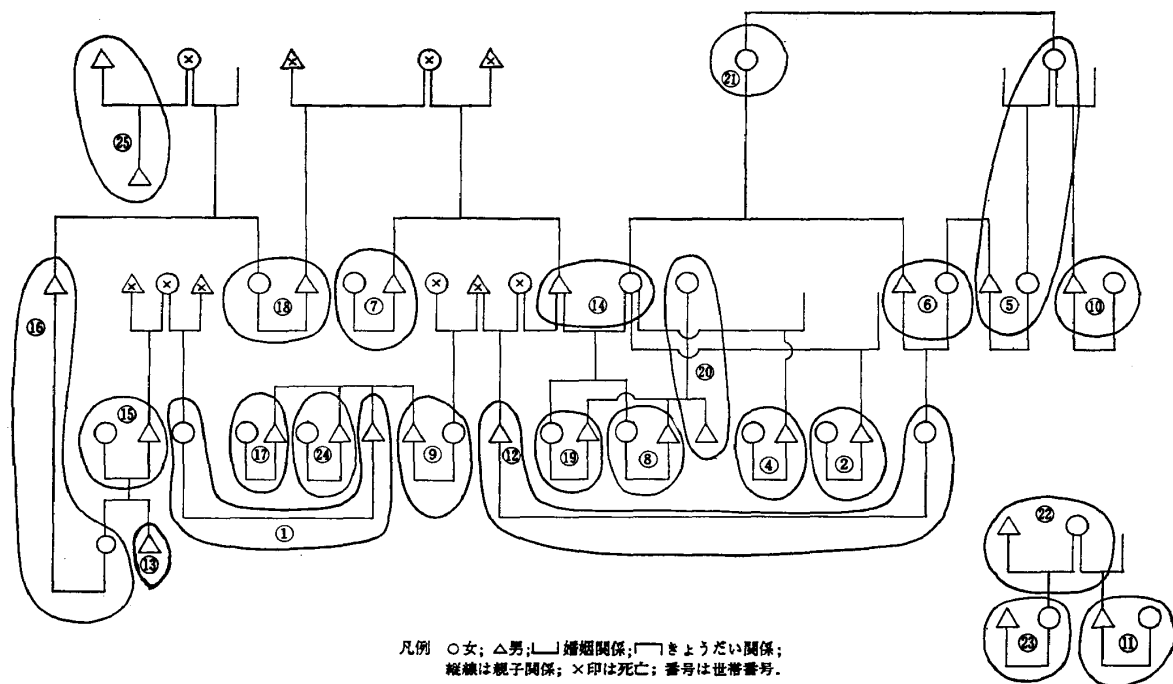


図3 系譜関係

ベフディの部落には小学校（3年教育，児童数24人，7歳から14歳）があり，そこで教えている先生はベツィレオ（Betsileo）人で妻はアンディラメナ出身のシハナカ人である（人口については表1参照）。このように明確に外来者と自分でも思い，他人もそうに見なす以外は，なかなか住民の帰属を決めるのは難しい。もちろん30歳代以下ではベフディ生まれが圧倒的に多いが，それ以上の世代ではベフディで育ったが生まれは別というケースが多くなる。ベフディに移住する前の地域は湖岸のシハナカ地方と東のベツィミサラカ地域とがまざっている。世帯番号 No. 5 はイメリマンドゥスからベフディに移住してきたが，もともとアンブディヌヌカ出身で夫と妻との父はベツィミサラカで，彼らの母は共にシハナカである。⁶⁾ No. 6 もイメリマンドゥスから No. 5 と一緒に移住したが，夫の母がベフディに住むベツィミサラカであ

る。夫の父はメリナ，妻は No. 5 の夫の妹である。No. 10 はアンブディヌヌカからベフディに移って4年目であるが，もともとベフディ生まれという。夫の父はヴヒメナのシハナカ，母はアンブディヴァハンギ（Ambodivoahangy）のベツィミサラカ。妻の両親は東から来たベツィミサラカである。No. 17 は東のタナンベ（Tanambe）から来て4年目である。東のサハヴァイナ（Sahavaina）川流域あるいはサハタヴィ（Sahatavy），ムラフェヌ（Morafeno）から来たベツィミサラカは，彼のきょうだいである No. 1, No. 9, No. 24 の外に No. 11, No. 12 の親，No. 13, No. 16, No. 18, No. 20, No. 21 などがある。これらは，従って，北ベツィミサラカ族と言える。No. 22 はベフディに30年近くもいるが，フェヌアリブ（Fenoarivo）からの移住者で，夫はサカラバ，妻はツミヘティである。南ベツィミサラカ出身の長老 No. 14 は弟達 No. 7, No. 18, 娘達の世帯 No. 19, No. 8 の外に妻方の No. 2, No.

6) 我々のセンサスの対象となった部落人口は124人（男60人，女64人）25世帯である。

4, No. 5, No. 6, No. 21 などが直接の係累である。ただし妻はサハヴァイナのベツィミサラカである。

このように見てくると、単に親の世代だけを問題にしても、人の移動と血の混合とがひんぱんに行われていて、単純にベツィミサラカ、シハナカと割り切れないことが明確になる。

集落は道路を境に西と東に分かれる。西には小学校があり、8世帯が住む。東のベツィミサラカ地域から移住した人が多い。道路の東側には11世帯住んでいる。その中心は長老(No. 14)の係累である。道路にへだたれているとは言え、実質的に一かたまりの塊村であるが、No. 22, No. 23 は、1970年代に開いた水田の近くに住んでいるので、主集落からは1.5 km 程離れている。焼畑(tavy)に出小屋(trano tanimboly あるいは lasy)を持つ者は、一定期間本集落の家を留守にするわけであるが、本集落に家屋をもたない者も4世帯ある。これらは0.5 km から1.5 km 離れた、各自が現在作業している焼畑の中に家を作って住んでいる。そのうち2世帯はその近くで水田を作る。

III ベフディの農業と儀礼

ベフディの谷底を利用した水田(tanimbary; tsabo シハナカ語; horaka ベツィミサラカ語)は、約20 ha で、そのうち15 ha が実際に耕作されていると言われる。税金は1 ha 当たり年750 FMG (マラガシ・フラン)。水田コンプレックスには名称があり、15区画を同定したが、水田であるかどうかというのは、耕起が始まって稲が植えられなければ判別が極めて難しい。同じようなヘラナ(herana, *Cyperus latifolius*)の湿地でも、所有者が耕作すれば水田になるし、2, 3年放置されれば、これはまったく分からなくな

ってしまう。やや高みにある田は、それでも畦跡を残していることもある。水路は排水しなければ沼地化してしまうので、6月か7月に共同作業(raharahampiavana)を行う。水田でも、犁耕、耙耕あるいは蹄耕の後に直播するが、1984年から移植が一部に導入され1985年には3.5 ha が移植田となっている(一例では9月1日犁耕、その後蹄耕2回、そして畦作り、10月27日蹄耕、耙耕後播種、鳥追い、導水、除草の後に、5月初めに収穫。他の例ではヘラナを切らずに焼いて、水を入れ、蹄耕でヘラナを泥にすきこむ。後2回蹄耕と1回耙耕してから播種)。水田の価格は1 ha 当たり400,000 FMG するという。親族の先買権はあると言うが、現実には、ベツィミサラカよりシハナカが水田をより強く欲しがるようで、村にある水田の7~8 ha は部落を出ていった人がシハナカに売却したという。なお、アンピサラハナ村全体の水田面積は240 ha で、うち36 ha が天水田と村役場では報告されている。同村の古い水田はアンブディヌヌカの東と言われ、ここでは1950年に犁が導入され、1959年から移植が行われている。1960年代に、アンピサラハナ部落の南のマングリ川沿いの土地を開田したが、水路が完備していないので、犁耕乾田直播して耙でならず方法をとっている。ベフディにおける水田の歴史は恐らく入植者が自給用に、時に応じて水田を作ったものと思われ、1940年頃にもこの付近で4 ha の水田があったという。昔は、アンブディヌヌカ、アンレバケリ、アンピサラハナの人々が、牛をベフディの人にあずけて、ベフディの牛飼いはそのかわりに牛を蹄耕のために自由に使ったという。従ってベフディの水田は柵がされていた。牛の所有者が蹄耕をする時だけ、牛は持ち主の所へ返された。当時は1 ha の田を100頭位の牛で1日で蹄耕し終わったという。

現在では、牛を持っている人に蹄耕を頼む

と1 ha 当たり 5,000 FMG と4 ヴェタ(vata 容量単位であるが重量で約13~15 kg) の粃を賃銀として支払う。犁であれば1 ha 20,000 FMG の賃貸料・労賃となる。ただし、これはシハナカ価格をそのまま適用した時で、実際には親族間などの間ではもっと安く行われている。部落内で、牛を飼っているのは6世帯であるが、内2世帯は1頭だけであるので蹄耕はできない。他の世帯の頭数は、10, 11, 17, 20頭である。これに対し、水田耕作を行なっている世帯は18世帯ある。0.5 ha を耕作している2世帯(No. 1, No. 3)はいずれも不在者の水田を借りている。他は自分で開田したものか、親が開田したものを相続したか、購入したかで、0.8 ha 1世帯, 1 ha 7世帯, 1.5 ha 1世帯, 2 ha 3世帯, 2.3 ha, 3 ha, 4.5 ha は各1世帯で、2世帯が共同で5 ha 所有している。⁷⁾ ただし、これら全部を必ずしも毎年耕作するとは限らず、例えば No. 9 のように1971年に開田しながら、牛がいないのでこの8年間は休耕しているという例もある。牛をたくさん所有している人は水田耕作面積も大きい。いずれにしろ、各戸聞き取りによる水田面積は31.1 ha にのぼり、村人の言う面積とは食い違う。あるいは税金を納めている分のみのことかも知れない。

所有権の明確な水田に対して、焼畑は用益権として使われる。伝統的には solajinja (森林に最初に斧を入れること) といって、開拓者の使用権が認められ、長く放置したり、他に移住した後でも、人々の記憶にあったり、証拠の開拓跡が確認されれば権利が再認される。また、売買権は無いが、本人が死んだ場合は子供あるいは孫あるいは配偶者に権利が移る。現在、ベフディでは、1980年から5年の期間、森林局から1,000 ha の森林を使用

する許可を得ている。そのうちどれだけを焼畑(tavy)にするかは、フクヌルナ(fokon'olona, コミュニティ; その責任者はフクンタニ委員, コミッティ Komity Mpanatan-terakyny Fokontany) として決める。森林局に対しては用益者の名前と家族数とを報告し、一定額(年間1,500 FMG。ただしフクヌルナ内では18歳以上の男女から50 FMG ずつ徴収する)を支払う。約50 ha が焼畑として使われ、毎年2~3 ha 新しく開かれているというコミッティの説明である。森林(アティアラ aty ala) が焼畑(タヴィ tavy) になった次の年位は、稲株が残っていて草がそれを覆う程生えていない状況であるが、これをマチャンギ(matrangy) と言う。既に草木が茂った所はサヴカ(savoka) と言われる。チガヤなどの生えている斜面はハイ(hay) と称される。他人のサヴカを借用することもあるが、借料などはない。

焼畑を1986年に行なっているのは24世帯中20世帯(調査不能の No. 25 も実際には焼畑を行なっているが詳しいデータがないので省いている)である。規模は労働可能な人数によって制限されるが1~2 ha というのが多い。0.5 ha 3世帯, 1 ha 9世帯, 2 ha 5世帯, 3 ha と3.5 ha と4 ha とが各1世帯である。焼畑をもっていないのは小学校教員世帯と、80歳の老婆単身世帯のみで、No. 11 は昨年3 ha 耕作していたが今年は休み、No. 14 は3.5 ha のサヴカがあるが、水田拡張(4.5 ha) のため1983年から焼畑はしていない。焼畑の面積は各人の推測であり必ずしも正確に計測したものでなく、また報告面積全体にわたって一度に耕作するというのでもない。作物に応じてその部分部分を使っていくというケースが多い。それでも稲はすべての焼畑で多少とも栽培されている。焼畑における稲の収穫は一度に行われなことが多く、その量はことにあいまいになるが、大体の目

7) 世帯番号25は調査不能のため、これらの数字には含まれていない。

安として播種量をとってみると、1.5 ヴァタ (=23 kg) から7 ヴァタ (105 kg) まで平均 3.5 ヴァタ (53 kg) である。播種量対収量比の聞取りによる最低比15倍（移植田では1 ha 播種量15ヴァタで200～250 ヴァタから 400～450 ヴァタの収穫量）を収量として1.7から 0.8 トンの収穫量ということになる。ベフディから1986年にソマラック (SOMALAC アラウチャ湖周辺開発公社) に売られた米は陸稲3トン、水稲7トンの計10トンと言われる。

畑を焼くのは、アティアラ森林の場合6～7月に伐採、サヴカの場合は9～10月で、ともに10～11月に火入れをして、播種（穴あけ棒により穴播 mambory）をする。除草（2回）の後、4月頃収穫される。サヴカの場合1年耕作後放棄して、5年後にもどってくるという人や、1年、2年目は稲、トウモロコシ、マメを、3年目以降はタロ、サツマイモなどを植えると言う人もいる。聞き取りで20ケースのうち、新しく開いたアティアラで焼畑をしている人は5人、サヴカに新しくアティアラを加えた人は3人、残りはすべてサヴカ畑である。バナナ、桃、キャッサバ、サトウキビ、コーヒー、ラッカセイ、ヤム、タロなど常畑 (tanimboly) にも多く見られるものを植えている場合もあるが、多くは稲とトウモロコシを中心とする。

なお、収穫は水稲は鎌（昔は直刃、現在は半月形刃）を使い、陸稲はナイフで刈る。水稲は牛蹄脱穀 (manosy vary) が行われるが、伝統的には、Y字形棒による打穀 (five-ly vary) か足踏みによる脱穀 (manory vary) が行われる。ベツィミサラカではトゥフチャ (tohotra) という高床米倉を作るが、ここでは稲積み (kapira) にした後、焼畑に trano omby (牛小屋) という四方形の小屋を作り、そこに2週間から2カ月保存しておいてから、家に持ち帰る。部落の中では、シ

ハナカ型の円筒形米入れ (volombary) あるいは四角形 (terambary) が艚用に使われているが、陸稲の稲穂はフアンクアナ (hoan koana) という籠に入れられるという。

一般的に1週間のうち良い日とされるのは、月、水、金、土で、火、木は悪い日とされ、それに加えて日曜日にも埋葬や、ジュール (joro 祈願式) や重要な行事は行わない。とくに木曜と日曜とは、米作に関する火入れ、アンガディ (angady シャベル型鋤) の使用、収穫などは禁忌 (fady) とされる。

焼畑でのジュール（例えば伐採の前のジュールアティアラ joro aty ala）は種々あるものと思われるが、稲作に関する儀礼に関しては、ベツィミサラカでは、水祭り (joro rano), 水口祭り (joro vavarano), 水田祭り (joro tanimbary), 完熟前の稲への祈願 (petra-dango あるいは tsitsi-dango), 熟稲への祈願 (petra-bary あるいは tsitsi-bary), 米の浄化儀礼 (ala fadim-bary)

[Lahady 1979: 66] が行われていたと言われる。本部落での聞き取りでは、水祭りと収穫祭とのみを収録できたのにとどまった。

水祭り (joro rano) は、約10年前に水路を作った時に、フクヌルナとして行なったと言われる。それとは別に、1960年代に、この地方の農業の発展を阻害しているのは、それまで根強くあった犁使用の禁忌 (fady char-rue) であるというので、ベフディ、アンバラハズ、アンピサラハナ、アンブディヌマカ、及び隣村のアンパナンジャナナ (Ampanan-janana) の5部落共同で犁使用の汚れを祓うジュールを行なったという。これらの部落は、ベフディあるいはイヴァカカ、あるいはアンブマランギチャ (Ambomarangitra) と呼ばれる河川の水で水田を営んでいる。当時ベフディに住んでいた呪師が司祭 (mpijoro) となって、額が白で体が茶色の牛一頭が屠られ、その血を源流 (vavarano) に流したと

いう。

ヴァヴァラス (vavarano) は字義通りには、水口であるが、かなり上流の水取入口 (みなもと) を指す。稲が完全に熟する直前の新月 (volana tsinana) の夜で、月、水、金、土のいずれかの日に水口祭り (joro vavarano) が各水田所有者によって行われる。水口に、葉のついたバララタ (bararata, *Phragmites communis*) を1本立て、その前に20cm位に切ったバララタの幹を2本立てる。根刈りした7本の、実の良くなった稲穂 (salohimbary fito) を束ねて、葉のついたバララタの中間に結びつける。他の2本の竹管は蜂蜜で満たされ、その上には数本の別の稲穂が横置きにされる。カミ (zanahary) と先祖 (razana) に感謝のことばが述べられ、これらの稲穂・蜜は供物としてそのまま残される。⁸⁾

この儀礼は、そのヴァヴァラスから水をとっている水田の所有者すべてが参加して行われる。トゥアカ (toaka サトウキビなどから作られる蒸留酒) は一切用いられない。また、稲穂を「先祖の稲」(varin-drazana) として家屋の東北隅 (anjoro firarazana) につるすこともない。⁹⁾ もちろん、この儀礼は水稲

(vary ankoraka) のみである。

陸稲の収穫祭は joro mametra vary と言われ、満月の前半の夜 (volana mizetra) に焼畑所有者が行う。実ってきた稲を穂摘みして、そのまま脱穀する。玄米を焼いてからつく。焼米をラング (rango) という。ラングと糠 (mongo) とを別々に葉 (ravin-dongoza, *Amomum angustifolium*) で包んで家の東北隅にひっかける。残りはみんなで食べる。脱穀したあとの稲穂 (tsakimbary) は、三叉路に置いて、靱がらと石とで覆う。

焼畑では、先祖の稲 (varin-drazana) として、種靱をまいた残りの稲靱を東北隅にしまったり、収穫の最後に稲穂を2束とって東北隅につるし次年度の種靱にまぜる。いずれも種靱がたくさん稲を生じるようにとの祈願であるという。

IV 生活の単位と結びつき

単身世帯は2ケースで、独立前の青年と、娘夫婦の家の近くに住む老婆とである。夫婦のみの世帯は3ケース。父子あるいは母子世帯は各々に1ケース。夫婦と子供からなる世帯は14ケースである。そのうち子供が婚出していないのが9ケース (うち1ケースは連れ子を含む)、婚出者を含まず残った子供と暮している世帯が5ケース (うち2ケースは配偶者の連れ子を含む) である。残りの4ケースは引取り親族が含まれている。No. 2は妻の妹の、No. 19は妻の姉 (死亡) の子供である。他の2世帯は3世代以上にわたっている。No. 14の夫婦は、娘 (死亡) の子供と妻の第1イトコの子を引き取っている。実子はすべて独立しており、妻の母は単身で暮している。No. 5は夫婦・未婚の子供、離婚してもどってきた息子とその子供、それに妻の母親から成る。

これらの世帯の関係を示したのが図3であ

8) 他のインフォマントによると、このジュルの捧げられる対象は、土地霊 (jin'ny tany あるいは hasina tany)、水の霊 (jin-drano)、先祖 (razana) と言う。これによれば、先祖は次の墓のある所から招請される。イメリマンドゥス、マハチンジュ (Mahatsinjo)、アンブイサキナ (Ambohisakina)、アンテテザナンプ (Antetezanambo)、アンビサラハナ、アンバラハズである。これらはシハナカの土地であるので、水稲技術が儀礼も一緒になってシハナカから借用されたということも考えられる。

9) アンビサラハナのシハナカでは、収穫の前に12束の稲穂を東北隅につるして、varindrazana とする。水田の水口あるいは東北隅に1本の竹管を立てて、蜂蜜を入れ、その前に1束の稲穂を供える。これは joro varimena あるいは joro jinjabary といわれる。

る。ベツィレオ出身の教員は当然親類縁者がいないので省略してある。No.22, 23, 11 はサカラバとツミヘティ夫婦の係累である。他の世帯は血縁ないしは姻族の関係で結ばれる。その中心をなすのは No. 14 の夫婦と、17-24-1-9 の兄弟グループとである。図を複雑にしている婚姻関係は、婚姻経験者52人のうち24人が離婚経験者であることからわかるように、離婚・再婚がかなりひんぱんに行われているからである。男女別に見ると、男は21人对14人、女は31人对10人である。婚姻・離婚累積頻度数で言えば、男は52回対31回、女は50回対14回となる。

婚姻慣習はヴァンドゥザナとほぼ同じである。男側があらかじめ女側の婚姻承諾を得てから、あらためて婚資 (diafotaka) 額、婚姻日、式について両者の親族が集まって細目を決める。婚資は金ではなく、牛であるのがシハナカ (didiharena という) と異なる。花婿側が花嫁を迎えに行く時に、この婚資の牛と12枚の100フラン貨 (roa ambin'ny folo ariary) の「嫁の値」(tambimbaviana) とを花嫁の親に渡す。花嫁の父親が司祭となって “joro tsodrano” (加護の祈願) を行なう。カミ (zanahary), 先祖 (razana), 土地のカミ (ny rava-misy amin'ny tany) に7人の男の子、7人の女の子が生まれるように祈る。祝福の印として12枚の100フランの入った皿の水 (tso-drano) をかける。花婿の家への行進には、親を除いた親族が家具 (entana) をもってついていく。花婿の家では、花婿の親、親族が出迎えて家の中に招き入れる。ここで婚姻儀礼 (joro pananabadiana) が行われる。司祭は婿の祖父または父、兄がなる。花嫁の家のジュルと同じ祈願が行われる。その後、花嫁を迎えに行った者が、花嫁側の様子をその禁忌 (fady) と共に報告する。花嫁を送ってきた人々に食事を与え、新夫婦にはガチョウを食べさせる。牛肉

は禁忌である。それから招待者の共食 (sakafo ankianja) があって、夜遅くあるいは朝まで歌踊りが続く。翌朝は家具が家の中にちゃんとおかれて、両親・親族・フクヌルナに見せられる。一週間後、新郎・新婦はゴザ、布などのみやげをもって花嫁の両親を訪問する。婚資の牛は決して売られない。1年以内に離婚があった時は、この牛は花嫁側に返される。

離婚の原因の多くは姦通であると言う。男が悪い時は、妻は親元に帰って財の半分を請求する。夫は、妻の同意が得られれば、罰金を支払う (mandoa fady) ことによって、妻を連れもどすこともある。女性が悪い時は、夫が妻を彼女の親元に連れて行って直接説明する。この離婚では妻の財の取り分はない。この場合でも妻が罰金 (vola fady) を払い、夫が受けとれば元にもどる。5歳以下の子は母親が引き取り、それ以上は、男が悪い時でも、父親が望めば引き取る権利をもつ。

このように、婚姻・離婚では、ほぼ同じような手続きを踏むが、墓についてはここではメリナ式のレンガ (石) 積みの墓が入ってきていず、部落の南の丘の斜面に土墓があるだけである。¹⁰⁾

遺体は家の中央に、頭を北にして置かれ、女の時は女、男の時は男が洗う。肌 directly 巻かれるランバ (lanba 布) は foantaolana (骨と一緒に) と呼ばれ、それを lamba landy あるいは lamba soza で包む。その他の親族の送ったランバは遺体の上に置くだけ。ヴァンドゥザナのように3ヶ所ではなく6ヶ所で結ばれる (enina fatotra)。結ぶ

10) 約20～30基の墓がそれと判別しうる。頭の方に皿、釜、鍋、コップ、壺、サジ、ナイフなどが置かれている。土盛りの高さは10 cm から20 cm 位で、新しいものと思われるものは高く土量が多い。掘り起こされているものがその他に5基ある。墓穴は縦1.8 m、横0.5 m、深さ60 cm 位である。

紐は遺体を包んでいるランバをちぎって作る。3人または6人で結ぶ。通夜 (miandry faty) は1日ないしは3, 4日行われる。死者が年寄りであれば歌を唱うが、若ければ (tarora) 歌わない。葬儀にくる人にふるまわれる牛 (foarafa あるいは henam-paty) は金持で3頭。葬儀にくる人は mamangy maso (眼の訪問) といい、喪主にお金 (vola famangia-maso) を渡す。埋葬日は火、木、日が避けられる。フクヌルナが集められて埋葬地が決定される。父か母かの墓に入り、配偶者と一緒の墓には埋葬されない。例えば配偶者と一緒に埋めてほしいという遺言があっても、「死者の遺言は生者によって受け取られない」。遺体が運ばれる前に、子や孫が死者 (maventy mandeha) から祝福 (joro tso-drano) を得るためにお金を支払う。遺体は足から出されて台 (flanjana ny maty) に置かれ、4人の男がかついで、足を先頭にして墓へ運ぶ。足から墓穴に入れられ、頭は東方向、贈られたランバはすべて遺体の上に置かれる。台とゴザとはそのまま放置される。配偶者は埋葬場所に行ってはならない。埋葬後、親族の代表がフクヌルナ及び会葬者に感謝の辞を述べ、上記の joro tso-drano 及び vola famangia-maso の金を集めて、フクヌルナに fata tanimena (赤い土地を掃く) として渡され、フクヌルナ全員の間で配分される。汚れを落とすために joro fafy loha (頭を掃く儀式) が行われる。両親の生存している人 (velondray velondreny) が、牛の油脂 (menak' aomby) で遺族の頭をなで、水をかけ、"fanalana ny ratsy, hiavin' ny tsara" (悪い事よ去れ、良い事よ来れ) と唱える。この式が終わって初めて遺族は禁忌がとけて仕事ができるようになる。

V お わ り に

ヴァンドゥザナはシハナカだと主張し、ペフディはベツィミサラカであると言うが、両者の違いは焼畑 (tavy) をしているかしていないか、焼畑儀礼があるか無いか、その違いが集約されると言っても良い程、その他の違いは少ない。事実、彼ら自身も焼畑をしているのがベツィミサラカという理解をしているようである。社会生活一般では、墓を中心とする親族集団がペフディでは意識されることが無いというのが、大きな違いである。ただ、上記の墓の形態の違いは、ヴァンドゥザナの古墓はすべて土墓であることを考えると、昔は違いがなかったのかも知れない。ただ、ペフディでは立石が一切見られないことは注目しておいて良い ([Fernandez 1971] 参照)。ヴァンドゥザナ及びその南にあるディディは、シハナカ、ベツィミサラカ、さらにはベザヌザヌのいわば漸移帯にある地域である。彼らがどのように言おうと、客観的に言えば、あるいはベツィミサラカ的要素をもっているのを否定することはできないのかも知れない。しかし、ペフディのベツィミサラカも本拠地で伝統を守っているという意味での本来のベツィミサラカでは無いことを思う時、いったい、ベツィミサラカ的、シハナカ的というエスニシティの区別自体がはなはだ曖昧となってくる。¹¹⁾ もちろん、ベツィミサラカ、シハナカ、ベザヌザヌなどが比較的類似した文化を持っているということも認めねばならない。それにも拘わらず、エスニシティというのは、曖昧さから作り上げられていく標識にすぎないということをもっと強く認識せねばならぬかも知れない。その標識は少しずつのずれを持ちながら顕現し、時には同

11) マダガスカルの南端に位置するアンタンルイ (Antandroy) を「人間のつぼ」と形容した Esoavelomandroso [1986] などはエスニシティ形成を考える上に参考になる。

じ内容であっても別の標識であると主張されたりする。そう考えると、エスニシティの特色を唯一の拠り所として、人間を分類したり、親縁関係を指定するのは、本末転倒と言える。生業の選択、環境への適応を含めて、エスニシティ形成の過程がむしろ議論・比較されてしかるべきであろう。

参 考 文 献

- Battistini, René; et Vérin, Pierre. 1964. Vohitrondriana haut-lieu d'une ancienne culture du lac Alaotra. *Civilization Malgache* 1: 35-90.
- Esoavelomandroso, Manassé. 1986. Milieu naturel et peuplement de l'Androy. In *Madagascar: Society and History*, edited by C. P. Kottak et al., pp. 121-132. Durham: Carolina Academic Press.
- Fernandez, Marie-France. 1970. Contribution à l'étude du peuplement ancien du lac Alaotra. *Revue du Musée d'Archéologie* 3: 3-54.
- _____. 1971. Quelques aspects des coutumes et des monuments funéraires sihanaka. *Bulletin de Madagascar* 297: 187-192.
- ハウトマンほか. 1981. 『東インド諸島への航海』(大航海時代叢書) 生田 滋; 渋谷元則(訳). 岩波書店. (原著 Rouffaer, G. P.; and Ijzerman, J. W. (uitg. en toeg.) *De Eerste Schipvaart der Nederlanders naar Oost-Indië onder Cornelis de Houtman, 1595-1597*, I. 1915. Den Haag.)
- Lahady, Pascal. 1979. *Le culte betsimisaraka et son système symbolique*. Fianarantsoa: Librairie Ambozontany.
- Maeda, Narifumi; and Rabarijoelina Armand. 1988. Vandrozana: A Sihanaka Village in the Southeastern Region of Lake Alaotra. In *Madagascar: Perspectives from the Malay World*, edited by Y. Takaya, pp. 165-224. CSEAS, Kyoto Univ.
- Ottino, Paul. 1986. *L'Étrangere intime: essai d'anthropologie de la civilisation de l'ancien Madagascar*. 2 tomes. Paris: Editions des Archives Contemporaines.
- Ralaimihoatra, Edouard. 1982. *Histoire de Madagascar*. 4me ed. Editions de la Librairie de Madagascar.
- Vérin, Pierre. 1986. *The History of Civilization in North Madagascar*. Translated by David Smith. Rotterdam: A. A. Balkema.